

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 登録実用新案公報(U)

(11) 実用新案登録番号

实用新案登録第3223807号
(U3223807)

(45) 発行日 令和1年10月31日(2019.10.31)

(24) 登録日 令和1年10月9日 (2019.10.9)

(51) Int.Cl.

A 4 7 G 19/22 (2006.01)

F 1

A47G 19/22

E

評価書の請求 有 請求項の数 3 O L (全 8 頁)

(21) 出願番号 実願2019-3172 (U2019-3172)

(22) 出願日 令和1年8月23日 (2019.8.23)

(73) 実用新案権者 505448682

株式会社エラン

長野県松本市出川町15-12

(74) 代理人 110001210

特許業務法人 Y K I 国際特許事務所

(72) 考案者 野間 直彰

長野県松本市出川町 15-12 株式会社
エラン内

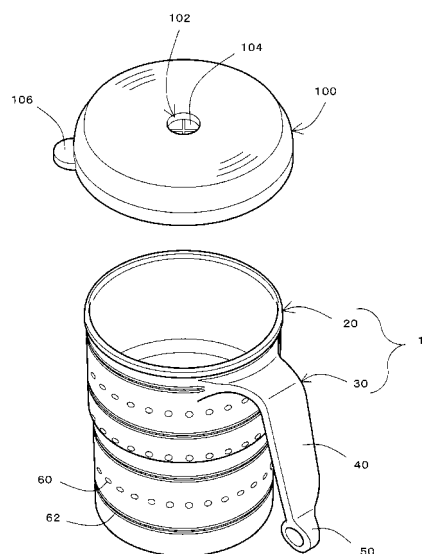
(54) 【考案の名称】 カップ

(57) 【要約】 (修正有)

【課題】開放型ハンドルからフックの脱落を抑制するとともに、手で保持する際にカップを安定して保持可能なカップを提供する。

【解決手段】カップ１０は、カップ本体２０と、カップ本体２０に接続されるハンドル３０を備える。ハンドル３０は、カップ本体２０の開口近傍に一端が接続されるとともに他端はカップ本体２０から離間された開放型ハンドルである。ハンドル３０は、アーム４０及び円環状のリング５０を備える。アーム４０は、ハンドル３０の一端から他端に向かって延設される。リング５０は、アーム４０に接続されハンドル３０の他端に設けられる。また、リング５０は、カップ本体２０の周方向に沿って通し孔が形成される。さらに、リング５０は、アーム４０と比較して、カップ本体２０の周方向に沿った幅が短い。

【選択図】図1



【実用新案登録請求の範囲】**【請求項 1】**

カップ本体と、
前記カップ本体に接続されるハンドルと、
を備えるカップであって、
前記ハンドルは、前記カップ本体の開口近傍に一端が接続されるとともに、他端は前記
カップ本体から離間された開放型ハンドルであって、
前記開放型ハンドルは、
前記一端から前記他端に向かって延設されるアームと、
前記アームに接続され前記開放型ハンドルの前記他端に設けられ、前記カップ本体の 10
周方向に沿って通し孔が形成された円環状のリングと、
を備え、
前記リングは、前記アームと比較して、前記カップ本体の周方向に沿った幅が短い、
カップ。

【請求項 2】

請求項 1 に記載のカップであって、
前記アームは、
前記カップ本体の開口近傍に一端が接続されるとともに当該カップ本体の径方向外側
に延設される張出部と、
前記張出部の他端に一端が接続され、前記張出部に対して傾斜して前記カップ本体の 20
軸方向に沿って延設される中央部と、
前記中央部の他端に一端が接続されるとともに他端が前記リングに接続され、前記中
央部に対して傾斜して前記カップ本体の軸方向に沿って延設される、下端部と、
を備え、
前記中央部の外表面の延長線が、前記リングの外表面の接線となる、
カップ。

【請求項 3】

請求項 2 に記載のカップであって、
前記張出部と前記中央部との開き角が鈍角である、
カップ。 30

【考案の詳細な説明】**【技術分野】****【0001】**

本考案は飲料用のカップに関する。

【背景技術】**【0002】**

例えば手に麻痺のある等の理由で、握る動作及び開く動作が困難な要介護者等のために
、持ち易い形状のカップが従来から知られている。例えば特許文献 1 では、カップの取っ 40
手部分であるハンドルの形状として、下方が開放された開放型ハンドルが使用されている
。ハンドルの開放端から手を差し入れることで、手にハンドルを引っ掛けてカップを保持
できる。

【先行技術文献】**【特許文献】****【0003】**

【特許文献 1】実用新案登録第 3 2 0 1 4 9 1 号公報

【考案の概要】**【考案が解決しようとする課題】****【0004】**

ところで、開放型ハンドルを用いる場合、ハンドルにフック等の支持具を通して、カップを支持させようとする、例えばカップの開口を下方に向ける等、カップの姿勢によってはフックからハンドルが脱落する。

【0005】

そこで本考案は、開放型ハンドルからフックの脱落を抑制するとともに、手で保持する際にカップを安定して保持可能な、カップを提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【0006】

本考案はカップに関する。当該カップは、カップ本体と、カップ本体に接続されるハンドルを備える。ハンドルは、カップ本体の開口近傍に一端が接続されるとともに他端はカップ本体から離間された開放型ハンドルである。開放型ハンドルは、アーム及び円環状のリングを備える。アームは、開放型ハンドルの一端から他端に向かって延設される。リングは、アームに接続され開放型ハンドルの他端に設けられる。また、リングは、カップ本体の周方向に沿って通し孔が形成される。さらに、リングは、アームと比較して、カップ本体の周方向に沿った幅が短い。

10

【0007】

上記考案によれば、開放型ハンドルにリングを設け、当該リングにフックを通すことで、カップの姿勢によらずに、ハンドルからフックの脱落を抑制可能となる。また上記考案によれば、アームを幅広にするとともにリングの幅を狭くすることができる。アームを幅広とすることで、手で保持する際に安定してカップを保持可能となる。またリングの幅を狭くすることで、当該リングの通し孔の軸方向長さが短くなり、小径のフック等、様々な形状のフックを通すことができる。

20

【0008】

また上記考案において、アームは、張出部、中央部、及び下端部を設けてもよい。張出部は、カップ本体の開口近傍に一端が接続されるとともに当該カップ本体の径方向外側に延設される。中央部は、張出部の他端に一端が接続され、張出部に対して傾斜してカップ本体の軸方向に沿って延設される。下端部は、中央部の他端に一端が接続されるとともに他端がリングに接続される。また下端部は、中央部に対して傾斜してカップ本体の軸方向に沿って延設される。さらに中央部の外表面の延長線が、リングの外表面の接線となる。

30

【0009】

上記考案によれば、アームの中央部をテーブル表面等の載置面上に置いたときに、リングとアームとによって、カップを支持可能となる。

【0010】

また上記考案において、張出部と中央部との開き角が鈍角であってよい。

【0011】

上記考案によれば、アームの中央部をテーブル表面等の載置面上に置いたときに、カップ本体が前傾姿勢となるので、カップ本体の水切りが促進される。

【考案の効果】

【0012】

本考案によれば、開放型ハンドルからフックの脱落を抑制可能となるとともに、手で保持する際にカップを安定して保持可能となる。

40

【図面の簡単な説明】

【0013】

【図1】本実施形態に係るカップと蓋を例示する斜視図である。

【図2】本実施形態に係るカップと蓋を例示する断面図である。

【図3】ハンドルを正面視するアングルにおける、本実施形態に係るカップを例示する図である。

【図4】ハンドルの形状について説明する図である。

【図5】本実施形態に係るカップを複数個積み重ねたときの例を示す図である。

【図6】本実施形態に係るカップを手で保持したときの例を示す図である。

50

【図 7】本実施形態に係るカップを、ハンドルを下にして置いたときの例を示す図である。

【図 8】本実施形態に係るカップをフックに引っ掛けたときの例を示す図である。

【考案を実施するための形態】

【0014】

図 1 には、本実施形態に係るカップ 10 と、カップ 10 に被せられる蓋 100 が例示される。また図 2 には、カップ 10 及び蓋 100 の断面図が例示される。例えばカップ 10 及び蓋 100 は、要介護者用の飲料容器として、介護施設等で使用される。

【0015】

蓋 100 は、例えばポリエチレン等の樹脂材料から形成される。蓋 100 は、略円盤形状であって、その中心部にストロー挿入口 102 が設けられる。また蓋 100 の径方向外側に、舌片部 106 が設けられる。

【0016】

図 1、図 2 を参照して、ストロー挿入口 102 には十字の切り込みが形成され、この切り込みの周辺にフラップ 104 が形成される。フラップ 104 はその周辺の部材よりも肉薄に形成される。ストロー挿入口 102 にストローを挿す際に、ストローがフラップ 104 を押し退けながら挿入される。

【0017】

蓋 100 の内面、つまりカップ 10 の開口 28 と対向する面には、その外縁に溝 108 が形成される。カップ 10 の縁 26 を溝 108 に嵌め込むことで、蓋 100 がカップ 10 に固定される。また舌片部 106 を持ち上げることで、カップ 10 から蓋 100 を取り外すことができる。

【0018】

カップ 10 は、例えばポリプロピレン等の樹脂材料から形成される。カップ 10 は、飲料が注がれるカップ本体 20 と、カップ本体 20 に接続される、取っ手部材であるハンドル 30 を備える。

【0019】

図 2、図 3 を参照して、例えばカップ本体 20 は半透明であって、注がれた飲料の液面がカップ本体 20 の外表面から視認可能となっている。

【0020】

またカップ本体 20 は、大径部 22 及び小径部 24 を備えた段差構造となっている。大径部 22 は相対的にカップ 10 の開口 28 側に形成され、小径部 24 は相対的にカップ本体 20 の底側に形成される。

【0021】

カップ本体 20 がこのような段差構造を備えることで、例えば図 5 に例示されるように、複数のカップ 10、10 を積み重ねることができる。つまり、大径部 22 と小径部 24 との間の段差構造を引っ掛かりとして、複数のカップ 10、10 が積み重ねられる。

【0022】

図 3 を参照して、カップ本体 20 の外表面にはリブ 62 及びドット模様 60 が形成される。リブ 62 はカップ本体 20 の外表面から径方向外側に張り出され、カップ本体 20 の周方向に延設される。またドット模様 60 は、カップ本体 20 の外表面に、カップ本体 20 の周方向に沿って所定間隔で複数印字される。

【0023】

例えばカップ本体 20 の中心軸 L1 (図 2 参照) 方向に沿って、リブ 62 とドット模様 60 とが交互に設けられる。例えばリブ 62 及びドット模様 60 は、50ml 間隔で交互に設けられる。すなわちカップ本体 20 の容積が 50ml、100ml、150ml、200ml、250ml、300ml、350ml となる液面レベルに、リブ 62 とドット模様 60 とが交互に設けられる。

【0024】

上述したように、カップ本体 20 は半透明であって、カップ本体 20 の外表面から注が

10

20

30

40

50

れた飲料の液面を視認可能となっている。このようなカップ本体 20 の外表面に、目盛りとなるリブ 62 とドット模様 60 とが設けられることで、カップ本体 20 に注がれた飲料の量を把握可能となる。

【0025】

図 1、図 2、図 4 を参照して、ハンドル 30 はいわゆる開放型ハンドルであって、カップ本体 20 の開口 28 近傍に一端が接続されるとともに、他端はカップ本体 20 から離間される。ハンドル 30 を開放型ハンドルとすることで、図 6 に例示されるように、ハンドル 30 の開放端から手を差し入れることでカップ 10 を保持可能となる。

【0026】

ハンドル 30 とカップ本体 20 との離間距離は、成人の手の厚みに基づいて定められる。例えば図 4 を参照して、ハンドル 30 のアーム 40 の中央部 44 の上端とカップ本体 20 との離間距離である最小距離 D1 は、15 mm 以上 20 mm 以下となるように定められる。また、アーム 40 の中央部 44 の下端とカップ本体 20 との離間距離である最大距離 D2 は、20 mm 以上 35 mm 以下となるように定められる。ハンドル 30 の離間距離が上方から下方に行くにしたがって広がることで、様々な手の厚みに対応可能となる。

10

【0027】

開放型のハンドル 30 はアーム 40 及びリング 50 を備える。アーム 40 は板状の部材であって、ハンドル 30 の一端、つまりカップ本体 20 の開口 28 近傍に接続される端部から、他端に向かって延設される。この他端にリング 50 が接続される。言い換えると、リング 50 は、ハンドル 30 の、カップ本体 20 と接続された一端に対向する他端に設けられる。

20

【0028】

アーム 40 は、その延設方向に応じて、張出部 42、中央部 44、及び下端部 46 に分けることができる。図 2、図 4 を参照して、張出部 42 は、カップ本体 20 の開口 28 近傍に一端が接続されるとともに、カップ本体 20 の径方向外側に直線的に延設される。例えば張出部 42 は、カップ本体 20 の中心軸 L1 とは垂直に延設される。

【0029】

張出部 42 の他端に中央部 44 の一端が接続される。中央部 44 は張出部 42 に対して傾斜して、カップ本体 20 の中心軸 L1 方向に沿って延設される。中央部 44 は例えば直線状に延設される。中央部 44 は張出部 42 及び下端部 46 よりも長く形成される。

30

【0030】

また、張出部 42 と中央部 44 との開き角 θ_1 は鈍角であってよい。開き角 θ_1 とは、張出部 42 と中央部 44 の内表面、つまりカップ本体 20 と対向する側の表面が成す角を指す。開き角 θ_1 が鈍角となることで、後述する図 7 に例示されるように、カップ本体 20 が前傾姿勢の状態でカップ 10 を置くことができ、水切りが促進される。

【0031】

図 4 を参照して、中央部 44 の他端（下端）に下端部 46 の一端（上端）が接続される。下端部 46 は中央部 44 に対して傾斜して、カップ本体 20 の中心軸 L1 方向に沿って延設される。例えば下端部 46 は中央部 44 よりもカップ本体 20 側に寝かされるようにして延設される。

40

【0032】

下端部 46 の他端（下端）にリング 50 が接続される。リング 50 はハンドル 30 の他端（下端）に設けられる円環状の部材である。リング 50 はカップ本体 20 の周方向に沿って通し孔 52 が形成される。後述する図 8 のように、この通し孔 52 にフック 72 が挿入される。通し孔 52 の径（内径）は、例えば 5 mm 以上 10 mm 以下であってよい。

【0033】

図 4 を参照して、中央部 44 の外表面 45 の延長線 L2 は、リング 50 の外表面 54 の接線となる。このような構成とすることで、後述する図 7 のように、アーム 40 及びリング 50 でカップ 10 を支持可能となる。

【0034】

50

図 3 を参照して、リング 5 0 の、カップ本体 2 0 の周方向に沿った幅 W 2 は、アーム 4 0 の、カップ本体 2 0 の周方向に沿った幅 W 1 よりも短く形成される。例えばアーム 4 0 について、安定してカップ 1 0 を手 7 0 で保持するため（図 6 参照）、また、アーム 4 0 を支持台としてカップ 1 0 を支持するため（図 7 参照）に、幅 W 1 は広い方が好ましい。その一方で、リング 5 0 については、小径のフック等、様々な形状のフック 7 2 が通し孔 5 2（図 4 参照）に挿入可能となるように、幅 W 2 は短い方が好ましい。

【 0 0 3 5 】

そこで本実施形態では、アーム 4 0 を相対的に幅広とし、リング 5 0 の幅を相対的に短くすることで、アーム 4 0 によるカップ 1 0 の保持及び支持の安定性と、リング 5 0 にフック 7 2 を挿入する際の容易性とを両立させている。

10

【 0 0 3 6 】

図 7 には、カップ 1 0 がテーブル等の載置面 7 4 上に置かれた時の様子が例示される。この図では、ハンドル 3 0 が支持台として用いられる。つまり、アーム 4 0 の中央部 4 4 の外表面 4 5 を下面として、載置面 7 4 上にカップ 1 0 が置かれる。この時、中央部 4 4 とリング 5 0 とによってカップ 1 0 が支持される。

【 0 0 3 7 】

また上述したように、アーム 4 0 の張出部 4 2（図 4 参照）と中央部 4 4 との開き角 1 が鈍角であるため、図 7 のようにアーム 4 0 を下にしてカップ 1 0 を載置すると、カップ本体 2 0 は、その開口 2 8 が斜め下を向く前傾姿勢となる。その結果カップ本体 2 0 内の水切りが促進される。

20

【 0 0 3 8 】

図 8 には、カップ 1 0 をフック 7 2 に引っ掛けたときの例が示される。リング 5 0 の通し孔 5 2 にフック 7 2 が通される。リング 5 0 は閉じた円環形状であるから、カップ 1 0 の姿勢によらず、リング 5 0 からのフック 7 2 の脱落が抑制される。

【 0 0 3 9 】

また、リング 5 0 の幅 W 2（図 3）がアーム 4 0 と比較して短くなるように形成されているので、曲率半径の小さいフック 7 2 であっても、通し孔 5 2 に挿入可能となる。

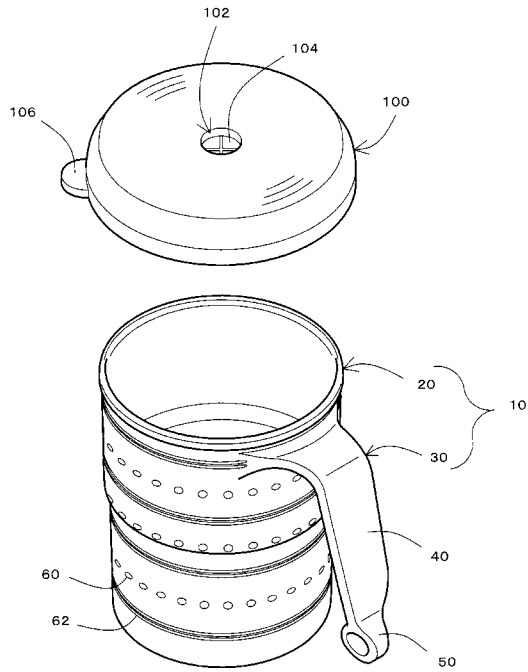
【 符号の説明 】

【 0 0 4 0 】

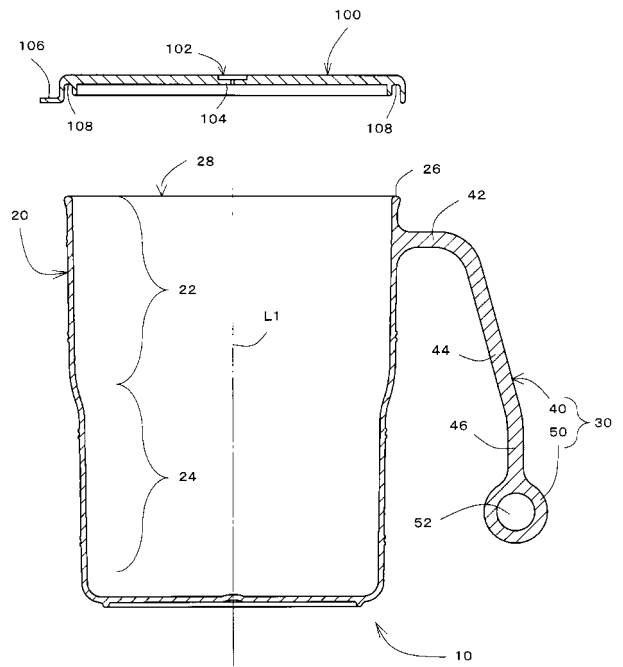
1 0 カップ、2 0 カップ本体、2 2 カップ本体の大径部、2 4 カップ本体の小径部、2 6 カップの縁、2 8 カップの開口、3 0 ハンドル、4 0 アーム、4 2 アームの張出部、4 4 アームの中央部、4 5 アーム中央部の外表面、4 6 アームの下端部、5 0 リング、5 2 通し孔、5 4 リングの外表面、6 0 ドット模様、6 2 リブ、7 2 フック、7 4 載置面、1 0 0 蓋、1 0 2 ストロー挿入口。

30

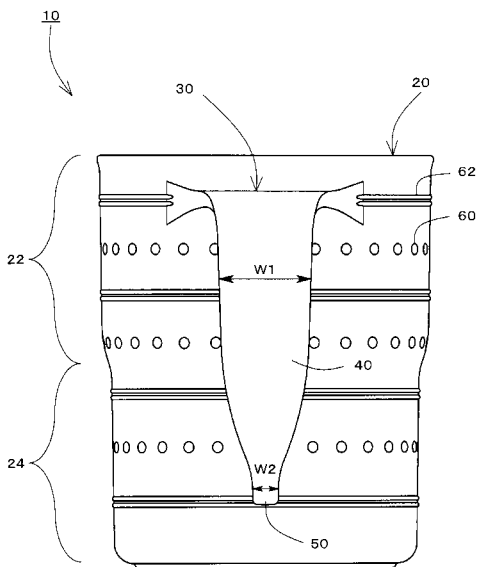
【図 1】



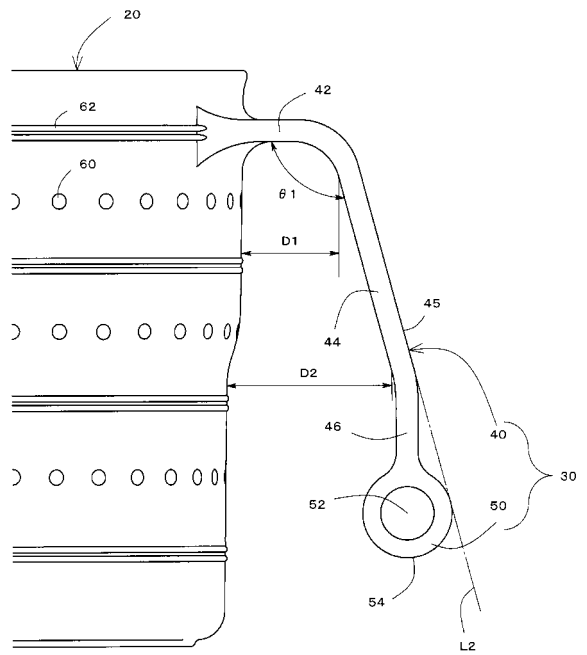
【図 2】



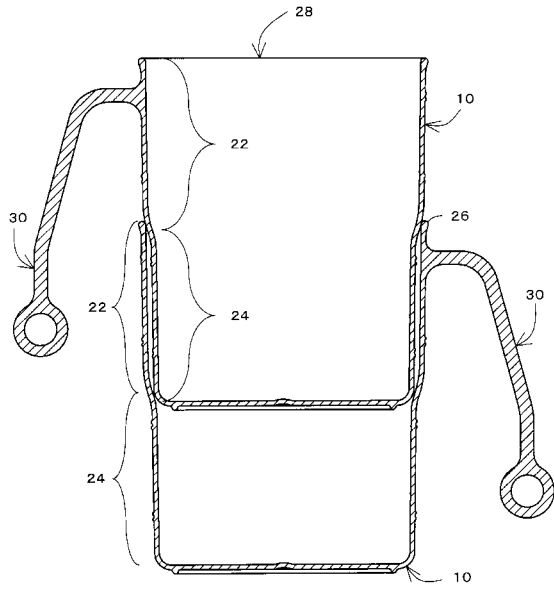
【図 3】



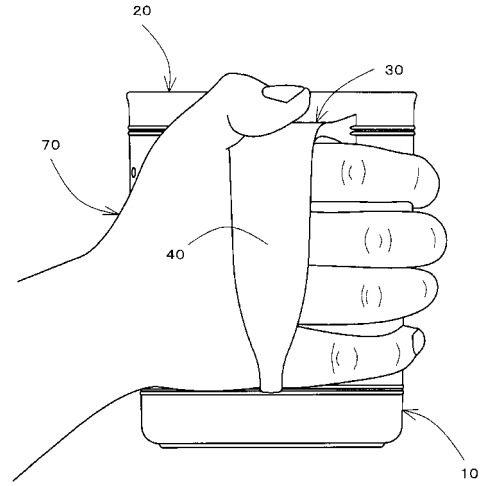
【図 4】



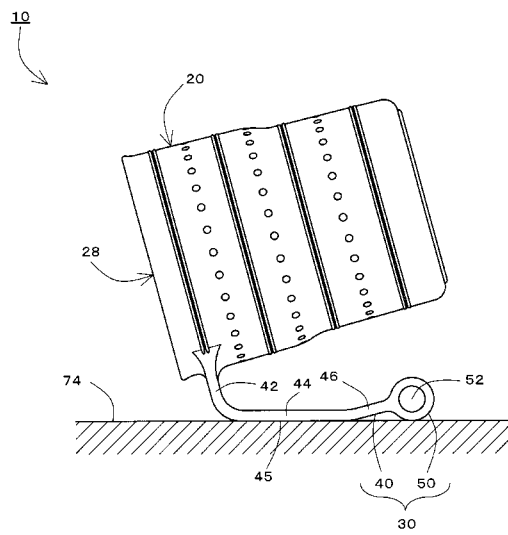
【図 5】



【図 6】



【図 7】



【図 8】

